



Title	〈異質性〉をめぐる集合性変容過程に関する研究 : 動物介在療法・ロボット介在活動の事例を踏まえて
Author(s)	加藤, 謙介
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44837
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	加藤謙介
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 18328 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	〈異質性〉をめぐる集合性変容過程に関する研究 —動物介在療法・ロボット介在活動の事例を踏まえて—
論文審査委員	(主査) 教授 大熊由紀子 (副査) 教授 藤田 綾子 助教授 渥美 公秀

論文内容の要旨

本論文は、〈異質性〉の出現による集合性の変容過程について検討することを目的とした。具体的には、高齢者施設における動物介在療法、及び、ロボット介在活動の事例を検討し、動物介在療法・ロボット介在活動導入に伴い観察された様々な変化を、関連する集合体全体を視野に入れて検討した。その、上で、【1】グループ・ダイナミックスの理論の陶冶、【2】動物介在療法・ロボット介在活動の現場に対する実践、の2点に寄与する知見を得ることを試みた。

第1章 グループ・ダイナミックスの視座

第1章では、本論文の理論的基盤である、グループ・ダイナミックスの視座を整理した。グループ・ダイナミックスは、社会構成主義と共同実践の2つを前提とし、集合体の全体的性質（集合性）の動態を研究する学問領域である。

集合性には、「集成的行動」と「コミュニケーション」の2つの側面がある。「集成的行動」とは、集合体をその環境も含めて1つの全体として捉えた時に観察可能な、集合体の動きのことである。この環境には、物理的環境に加え、繰り返され物象化した集成的行動（ものの環境）がある。一方、「コミュニケーション」とは、集合体における規範を生成・維持・変容する過程のことを指す。規範には、言語的に指示できるものと、言語化不可能なもの（場の〈表情〉）がある。既存の集合性は、異質な集合性、〈異質性〉の出現により変容する。本研究では、〈異質性〉出現による集合性変容過程を、高齢者施設における動物介在療法・ロボット介在活動の事例を検討することを通して、例証を試みた。

第2章 先行研究の概観

第2章では、本論文で検討した事例に関わる先行研究を概観した。近年、動物やロボットを治療場面に介在させるケア手法（動物介在療法・ロボット介在活動）に注目が集まっている。動物介在療法については、既に様々な対象者に対して実施され、これまでに生理的・心理的・社会的効果の3つの効果が見出されている。ロボット介在活動については、研究・実践ともに例は少ないが、動物を介在させるケア手法の方法論を踏襲し、徐々に知見が集まりつつある。

本論文は、動物介在療法・ロボット介在活動の実施場面を、集合性の変容過程という観点から検討することで、動

物介在療法・ロボット介在活動の実践に寄与する知見を得ることを試みた。

第3章 〈表情〉の変化：老人性痴呆疾患治療病棟A病院における動物介在療法の事例

本章では、加藤・渥美（2002）をもとに、特に「コミュニケーション」の非言語的側面である〈表情〉を理論的観点とし、〈異質性〉出現による集合性変容の端緒を検討した。具体的には、老人性痴呆疾患治療病棟において約10ヶ月間実施された、犬を用いた動物介在療法（ドッグ・セラピー）に対してフィールドワークを行った。

事例を検討した結果、施設におけるドッグ・セラピーの実践が、場の〈表情〉の変化を契機として展開する集合性変容過程であることを明らかにした。特に、ドッグ・セラピーの場という〈異質性〉の導入は、対象者集合体だけでなく、施設職員やボランティアの集合体の集合性にも変容をもたらす事態であることを示した。

第4章 「役割」の反転：老人保健施設Cにおける動物介在療法の事例

本章では、Kato & Atsumi (in press) をもとに、特に物象化した集合的行動（もの的環境）である「役割」を理論的観点とし、〈異質性〉出現による集合性変容過程の内実を検討した。具体的には、老人保健施設において約1年間実施されたドッグ・セラピーに対してフィールドワークを行った。

事例を検討した結果、第3章での知見が確認されるとともに、ドッグ・セラピー実施場面における集合性変容過程に、「ケアする者」「ケアされる者」という「役割」の反転という内実があることを明らかにした。また、ドッグ・セラピー実施場面が、既存の「役割」が変化（反転）することを通してホスピタリティの場となっていることを論じ、施設ケアにおける動物介在療法の実践的意義を示唆した。

第5章 「物語」の生成：有料老人ホームKにおけるロボット介在活動の事例

本章では、加藤・渥美・矢守（審査中）をもとに、特に「物語」論を理論的観点とし、〈異質性〉出現による集合性変容の動的なプロセスを検討した。具体的には、有料老人ホームにおいて約10ヶ月間、ペット型ロボットを用いたロボット介在活動を実施するとともに、同施設でフィールドワークを行った。

事例を検討した結果、ロボット介在活動という〈異質性〉をめぐる、当該集合体に『（ロボットに対する）「心の読み取り」—解釈の「共同的承認」—物語の生成』というプロセスがあることを確認した。また、ロボット介在活動における、「物語の共同的承認者」としての他者の重要性を示唆した。

第6章 動物介在療法・ロボット介在活動のグループ・ダイナミックス

本研究の理論的意義は、〈異質性〉をめぐる集合性変容過程を、高齢者施設における動物介在療法・ロボット介在活動の事例を通して、よく例証できたことにある。特に、〈表情〉、「役割」、「物語生成」という3つの理論的観点を援用したことで、〈異質性〉をめぐる集合性変容過程について3種類の分析視点を提示できたことが、本研究の、グループ・ダイナミックス研究への理論的貢献となる。

動物介在療法・ロボット介在活動の実践に対する本研究の意義としては、次の4点の知見が挙げられる。第1に、2つのケアが、ともに、ケアされる側だけでなく、ケアする側にも変化をもたらす集合的な事態であること。第2に、2つのケアが、既存の「ケアする者」「ケアされる者」という前提に変化をもたらすものであり、それゆえ施設ケアにおいて独自の役割を担うこと。第3に、2つのケアにおいて、動物やペット型ロボットの存在は必要条件ではあるが、十分条件ではないこと。即ち、動物介在療法・ロボット介在活動のよりよい実践のためには、2つのケアをめぐる「物語」を、共同で構築する他者（ケアに従事する人間）こそが重要な役割を担っているということ。第4に、動物・ロボットをめぐる「物語」を、その〈異質性〉が当たり前になった後も、共に生成し続けることが重要であること。以上4点の知見を提示できたことが、本研究の実践的意義である。

引用文献

- 加藤謙介・渥美公秀 2002 動物介在療法の導入による集合性の変容過程：老人性痴呆疾患治療病棟におけるドッグ・セラピーの事例 *実験社会心理学研究*, 41(2), 67-83.
- Kato, K., Atsumi, T. (In Press). Hospitality in the care: A case of dog therapy at a geriatric institute. Kashima, Y., Endo, Y., Kashima, E., Leung, C., and McClure, J. (Eds.), *Progress in Asian Social Psychology*, 4, Seoul, Korea: Kyoyook-kwahak-sa.
- 加藤謙介・渥美公秀・矢守克也（審査中）ロボット介在活動における物語生成：有料老人ホームにおけるペット型ロ

論文審査の結果の要旨

本論文は、〈異質性〉をめぐる集合性変容過程について、高齢者施設における動物介在療法・ロボット介在活動の3つの事例を、グループ・ダイナミックスの観点から検討したものである。

第1事例では、老人病院における動物介在療法に対し、場の〈表情〉の変化に着目して検討を行い、集合性変容の端緒を考察した。第2事例では、老人保健施設における動物介在療法を、施設における「役割」の変化をキーワードに検討し、集合性変容の内実を考察した。そして、第3事例では、有料老人ホームにおけるロボット介在活動に対し、人々の言語的なやり取りを中心に分析し、集合性変容の動的な過程を検討した。研究手法としては、参与観察、インタビューを中心とするフィールドワークを採用したが、ビデオデータを用いた分析方法を開発するなど、定量的・定性的な分析手法を併用し、事例を詳細に検討した。

本論文は、3つの理論的観点を用い、高齢者施設における動物介在療法・ロボット介在活動の事例を、様々な手法を用いて検討することで、〈異質性〉による集合性変容というグループ・ダイナミックスの主題に、新たな理解と知見をもたらすものである。

以上の理由より、本論文は、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものであると判定された。